（遞信省認可）

掲載要目

懸賞文藝
意中の人

美妙齋及び朧月子の
韻文二種

第七拾一号

定價一冊二錢五厘

明治二十三年十月五日發兌

日本音樂史稿

樹翠陰史の言文一致論

小蓮女史の小説

其他各種の通信問答

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

いらつめ第七十一号目次（明治廿三年十月五日）

意中の人の品さだめ（懸賞文藝）……………………準縄子
日本音樂史稿（一）……………………………………美妙齋
大雨終よ群馬埼玉れ產を沒す（韻文）
奴婢と使ふ心得
秋夜野行（韻文）………………………………………朧月子
足れ冷えるを防ぐ法
懸賞小說（中）…………………………………………小蓮女史
日本文華の岸上質軒氏に……………………………樹翠陰史
記者さま方の御意見？…………………………………挽箏女史
東洋奇術新報記者に忠告す…………………………同上
近眼速治法
美人と伴人
美男子
キユーリオシテイ　オフ　リテラチユア
立花屋かをる氏
都下今日の書料
蛇退皮の代用
秋の七艸
日本古代女流の著
一女生の小說
金と紅との水引を結ぶ心得
帛紗のたゝみ方
茶を飮む心得
エレメンタリーとデスクリプシヨン
醉沈香の解釋
「シク」の意義

誌代及び社則　いらつめ一部並製金二錢五厘郵稅共金三錢、十二部金二拾九錢郵稅共金三拾五錢、二十四部金五拾七錢郵稅共金六拾九錢、三十六部金八拾四錢郵稅共金壹圓〇二錢、四十八部金壹圓十二拾四錢〇別製一部金三錢五厘郵稅共金四錢、二十部金六拾五錢郵稅共金七拾五錢、五十部金壹圓六拾五錢郵稅共金壹圓九拾錢〇並別兩製共前金領收の上で無くては差上げぬ事〇府內に限り無郵稅〇每月二回（五日及二十日）發兌〇金子御差し送りの手續きハ郵便小爲替なれば拂渡郵便局とある處に　神田郵便局と記し受取人欄內に（神田平永町九番地成美社）と御記入の事〇郵劵代用に郵便爲替の無い處に限り五厘切手で一割增しなれは妨げ無い事〇見本は五厘切手で並製五錢別製七錢領收の上差し上ます〇廣告料一行金八錢、割引無し

從第六十八號至第七十七號十部版權所有
明治廿三年十月四日印刷　明治廿三年十月　日出版
發行人　東京市神田區平永町九番地居住　山田武太郎
印刷人　東京市本郷區駒込西片町十番地居住　山本鑑之進
發行所　東京市神田區神田平永町九番地　成美社

〇懸賞文藝新題

〇第三十回題（唱歌文章に限る）　十月十日〆切
右　殘夢
〇第卅一回題（唱歌文章に限る）　十月廿日〆切
右　猫
〇第卅二回題（何でもよし）　十一月十日〆切
右　新婚旅行の人に贈る
〇第卅三回題（唱歌文章よ限る）　十一月廿日〆切
右　小春日和
〇第卅四回題（何でもよし）　十二月十日〆切
右　鳥蔭れ獼猴
〇第卅五回題（何でもよし）　十二月廿日〆切
右　春衣裁縫
〇第卅六回題（何でもよし）　一月十日〆切
右　人に半襟と送る

賞品も菊水摸樣の金又は銀杯　右賞品は一等賞の者、二等三度の者、三等六度れ者、四等十八度れ者及び是と同じ資格に相當する者に限り進呈します。

文藝美術

第二十八回懸賞文藝審査得点

題 意中の人れ品定め

○和歌

時そぎて花ハちるともあれくて
あのね君こそ色まさりけれ………本吉ミは(加賀)

まよふべき色香なくとも呉竹の
すぐなる君ぞゆかしかりける………同上

山吹のうるはしき色に迷ひめや
うつろひぬれど訪ふ人もなし………撫琴女史(ミノ)

以上三首第四等賞

心かはしらねと思ふ我せこれ
月のかつらも終に折らまし………横山ひろ(加賀)

右第三等賞

まやろしの影にもむねのとゞろくは
あやしかりける我こゝろかな………永島芳子(リウア)

くれ竹の世々もかハらぬこの君れ
ミさをのふしを見んよしもがな………仝上

以上二首審査以外

○唱歌

(イ) 撫琴女史(ミノ)

柳の枝にさくら花 梅のかをりとそふるてふ
いにしへうたのめづらしき こゝろにかなふ君もがな。

仝上

(ロ)

あだにみだるゝはなのくさぐさ、 ひとしはゆかしきもゝのひともと。 あだしいろかハうつろひぬとも ひとりむ
そべりまごゝろのみぞ。

以上二曲無賞

(ハ) 有松渊(レツン)

風吹ば風のまにゝゝ雨降ば 雨のまにゝゝかたよりに
おもひなびてたてれる 姿も見せず亂れる
心も持たぬ床しさは たゞかりそめの色香もて
すべての人にそやさるゝ あだし櫻のたぐひかは。
あな愛らしの柳やな。 あな愛らしの柳やな。

右第四等賞

○文章

(イ) 香園女史( )

「おい君饒舌ぢやないよ。眞實僕ア君ヲ忠告するんだ。
君だッて親族の者と結婚するとそういふ害がある……まアさ
聞き玉へ……有ると云ふ事は知ッて居玉ふだらう。 え高木
君……」

相手の男も無言、きまり悪るさうに鼻下の髭を撫でながら
下を向いて無用に疊を見詰めてゐました。

「高木君どうだい。 君の性質にも似合もない。 何と愚

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

圖々々してる玉よ。 矢張り僕の言ッた事がぐッと御氣に障ッたと言ふ……」

「馬鹿な。 僕も決して君の忠告を惡く思ふなんてへ事は無論無いさ。 實に忝く思ふよ。 だがねこれは人間一生の大禮だから……まア兎も角も一つ考へて見ましやう」。

「本當に能く考へて見玉へ。 何もそんなに急ぐ程でもないからね……えゝと所でそのめでた話しに何所かへ君驕りたまへ」。

「とゝ君は實に酷い。 何か言ふと直に仕舞ひは驕りだ」。

「酷いるッて君兩手に花だからね。 精養軒位るは……お易い事さ」。

「實にどうも人が惡いよ」。

「るアよ少しも」。

高木も傍にある帽子を取り、一禮しました。

「其れぢや何れ夕方から、今日は用も有り升から……失敬」。

「はゝゝとう〳〵驕りか。 ありや面白い。 實に奇だ。 だがの君小田評でもなからうね。 え小田評では」。

「馬鹿な。 何れ後程、失敬」。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

此所は八疊の新坐敷、唐木の机に向ッて何か物思ひに沈んで居る高木照男、顏色も常とは變ッて少し蒼白、そもどう云ふ譯か？ 吐息と共に何か獨語と放ちましる。

「ある妻えらびもなか〳〵六ケしい者だ。 いッそ娶らない方が世話が無くッて好い……でもそれでもちとなんだか馬鹿氣てゐるし、さうかとて信子をと思へば親族で余りどッともしないし、もう此上は芳野れ花子、彼れも中々の淑女だがどうも信子も棄てられない婦人だ。 密畫の巧手で、此間も某會へ出して一等賞を得たッて……其んな佳人とまアあんで ひさ〳〵と人の者に……え仕方がない親族でもなんでも捨てないはッ」。

かうは言ッた者の能く〳〵思へば朋友達があれ程くれ〴〵も言ッてくれた事殊には芳野の花子とても教育を受けた婦人信子が如何に密畫の巧みだとてちと御轉婆にかたむいた娘でいとある蓮葉、淑徳を備へて天晴れ高木の妻にして恥かしくないも花子。 今は高木も何方が好いかと思案に暮れてゐました。 折りしも耳を貫いた一聲、何？ 妹の部屋に聞えた談話です。

「貴孃どちらが好いでしやうね」。

「さうですね月よりも矢張り花の方が宜しうムいますよ」。

發矢！ 之を聞いた高木、思はず手を打ちましる。

「今れが辻占だ。 月よりも花……月と云のは秋月の月即ち信子の姓……どうしても花子だ。 斷然花子だ」。

右無實

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

（一）　　藤元あさ（サカヒ）

かねてから御心配の二百十日も誠に此上なしの好天氣、今年の作物は澤て豊かです。　他郷の身ながらも窃にそれと祝しました。

扨柳澤文子の事に就て度々のお尋ね、　誠にお諭しの通り妻は偕老同穴一生憂苦と共にすべきもの……冗談半分の撰擇などして此身も決して思ひません。　で今重覆の處も顧みず更に文子の性質なり品行なりを申しましやう。

性質、此前にも申し上げた通り文子は何分田舎に生れただけ温厚で柔和で全身澤て靄々の氣に充たされてゐるかと思ふばかり、近頃珍らしくない輕佻浮薄といふ様の悪分子なぞは中々見ることもありません。　そして其物と扱ふの丁寧さ。　つ半紙一片、是さへ無益に使ったのをまだ知らぬ位です。　無慚ひ此間水の壓力研究の時過つて其器を覆へしました。　若の此身直ちに浴衣でそれを……同時に傍で見てゐた文子、「あなた何を……お退きよ」と叱る様な口調で拭ふてくれました。　しかし此等の事こそ左程矢釜しく言ふにも足らぬ話、今一つ通常人で得難い徳を文子は具へてゐます。　去る十八日の朝方文子と此身に向つて頻りに二圓程の金を請求しました。　如何ほど尋ねても只「入りませから」との返事ばかり、この度々の尋ねに包みかねた風情で文子も遂ひ申しました。「實はあの此間或新聞を讀みましたが、林清吉と申す子がね幼少の身ながら病身の父母を養ったり、弟あり妹ありを甲斐々々しう育てたの中々感心の子ですからそれで惠まて遣りたいの」。でも文子の心誠に殊勝の至りでしやう。

十分御存知でも有りましやう今日の女子少しく學問をすると直に男女同權だの、一夫一婦だのつて奇妙の理屈を幷べ立て、中々生意氣な次第です。　が、文子ばかりは決して此弊を見受けません。　一昨日清風樓上で催した懇親會の席上に於て文子が通ふてゐる女學校の教員葉村君が此身に向つての話「文子孃ばかりは實に感心の至りです。　休憩時間なぞには他の女子が俳優の品評なぞ様々くだらぬ事を喋舌つてゐても文子孃は只獨り一室で書見……誠に眞正の今日の女子です……眞に文子は他人の事を品評致しません。　それで亦他人から品評を受けた事も無いです。

容貌、と云った處別に艶麗でも有りません。　併し愛らしい目元、優しい口元、下女下男を丁寧にあしらふ風が十分に現はれてゐます。　別封にあるのは文子の寫眞です。　とくと御覧下さい。

文子の事についてはまだ〳〵申上たいですがいづれ此身も今月の末遲くて來月の上旬を以て一度歸省も致しますから其時を以て更に精しく文子のお話しも致しましやう。　願ふ妻は一生苦樂を共にして行くもの、平素の言行を審らかに知らずては……わが尊敬せる父君座下、何卒十分にお察し下さい。

評　一模糊
右第三等賞の下

座（ホ）　一一女史（トワケイ）

座敷に通入りし時は何の事もなう只管に面てゆき許りにて疊むともなく眼は視えず、いつの間に坐りたるかそれさへ覺えず、目的もなく下むきたる許りなりし。

心なき母上や進まざるもよきものを……其儘にありてよ、など傍ふ寄り玉ふ意地惡るさ。　侑められたる一椀の茶に顏おちぬれば朗爽ある話し聲こ高からねども耳に徹するに驚てす見上げたる男、げに血筋こあらそはれぬもれ。額のひろさ、顴骨のたかさ、父上に其まゝ、口元より顋のあたりはむしろ兄上にこそ肖たれ、一体に形容よきといふ方にならねども何處ともなう氣高く品格あり、猛からねど赤犯しがたき風情あり。　心底よりいでたる口調もて母上との話し、嚴肅かまへて、なも打ちとけたる風情充分なり。　着けたるは薩摩がすりの單物、襟元の格好よさ、袖、袖口のほころび、まアつくろひもせずに四五寸。是ぞ我〻の從同胞。

そこらには一杯種々の新聞雜誌、樣々の書籍算と亂せり。机の上には二三帙の洋書をひろげ、傍に書きかけたる碁盤罫紙あり。　そべて此邊の亂暴あるに引かへて床のあたりは流石整然たり。　按排よく列べたる書架の上には吾も知りたる兄上の讀ませらるゝと同じき和漢英佛獨等の書籍も見ゆ。一段高き所一列の唐本を置きたるを横にかきたる細字を見れば王子の讀本あり。　黒く手すれよるも多し。　さては主人の愛讀の。　床には大悲の尊像を掛けた御前にうや〳〵しく一卷の御經なのもして。　此方にあるは一管の横笛……そッと主人の顏見る折惡く、突然從兄も此方を振り向きて、それより挨拶……其上に不言を喰ひしてとあれば善くせんと思ふ程返事のまづさ。　口惜しく〳〵。

はやお暇何……の用ありて母上の何時にあき急ぎ方……餘儀あければ御辭儀一應。今日はせ丁寧にしたる事はなかりし。　立ち際のたしなみを試驗場の思ひあり。　ふッと目につく室の片隅、一面に縫ひ刺したる一個のさして出でゝ、聞けば稽古衣。　えッ好丈夫！

＊　＊　＊　＊

また小說かとの母上のお言、吾胸躍る。

若（へ）　伊勢犬夫（イセ）

若し人ありて我に如何ある婦人と戀ひたまふと問けば、我こア゛ツインシイの妻月且を以てすべし。　然る後我こ不滿足あがらドウデの妻の如きものなれば之と戀ふべし。　而して我こ常に我筆頭の戀人と樂しむべし。　我こ我戀人の爲には想夫戀も作るべし。　また我肉身の爲には妻戀鹿も歌ふべし。然れども我こ常に我神魂を遠く理想的模範に置く。　蓋し我

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

所謂る理想的模範とは是を美妙、紅葉の小説的美人に求むか、さもなくば是を桂舟楓湖の浮世繪的美人に求むか、あゝこればかりあり〳〵、我が浮世になりては妻定めの見本は。

以上第三等賞上

（ト）　野村つらき（ヅス）

こゝろ東京へ出てからも思へばはや二年あまり、三年まへ殿様の御蔭で二人共に御世話になり、今日この頃身分にとつて何不足はないといふものゝ、天晴商人ぞ且那様と人には呼ばれ、我店先の暖簾のかげで數十人も手代番頭を追使はふものを我と我に盟つて身の目の前！　秤の音加減で人の目と横ぎる街道を馳足奔走にやッと生計をつけるとはゝても誰が罰か？　罰！　象牙の撥に猫の皮、三味線のその音色、お美那が浄瑠璃のあの聲色がもしこの六尺の身に何ともなかッたら何で爺父が異見の言に耳を脊けて勿躰もない！　舌を出して臍で笑はれたらう。　夢でゝも居た事かいつか彼女が母親に覺の瀧の段を語れと所望されながら我に盡す内心を見せ、打ッて替ッて朝顔日記の宿屋處を語つて、我を阿曾二郎に自分はみゆき、　東の旅とひくかなしさをうれしさと言はなかつたぞかり、余所ながら我に出京とすゝめた。　今はその殘の聲も我胸先とゑぐるやう。　それ時が實に身の彷徨の始め！　眼を糸筋にして顔をふり〳〵優節を語るその眼さへ横に偸目に我顔を打守つてゐた瞳孔の色の眞黒い！　黒髮が鬢ふおくれて、ほなゝき〳〵あのかみつきたかつた頬の笑靨をつゝく有様のおそろなさ。　昔は我胴骨をとろかし居ッて、つぼんだ口の紅は我血をも吸ふた。　やさしいその白い齒では我肉を裂ゐる。　たしかに其のくの字なりの腰が我心の駒をなめし革の鞭であやつッた。　我家庫は我弟に譲らせて、我には人の馬の鞍の守護とさせ、　我家郷を一足飛びに三百里こゝで此零落を今我に泣かせるへそもそも誰が。　これ女め！　畜生！　仇敵！　これ紺足袋の底ふかりて、蹴飛ばしてくれても足らうか！

それおなのらむかし可愛氣もある、つまりは共に身から出た錆。　悔まぬ先の身の覺悟に零落れた我を零落れたともせぬ、三百里西の端からその脾弱い三味の手一つでこゝまで我を尋ねて來て、男の甲斐性もある事か、これまづしい生計にでもたゞの一度苦しいと云つた事なく、たゞの一度何として我吩附に背向ッた事もない。　殿様の御機嫌大事に我身を大事に扱ふさまはそれ殊勝さ！　國を出るまで　いつも韓信やられ事を小歌に唱ふて、男の氣をはげます我にまさッた氣性、その小歌の聲のこの昔の耳と勢ひて、感服の目に湧く涙が我心の鏡をもくらました。　少しの身代と親から譲りうけて愚圖〳〵々々　竈の隅に目をかけるのが男の分か。　たとひ車を曳かふが、馬ーか、よくも云ひ當つた！　を牽かふが、我腕で絞つた我が膏より外に旨味か何處にならう？　何一つ身に覺えないにしろ五尺に餘る男の形体をもつてゐながらに親のもれ

貰ひたさ。　そぢ〳〵と親の頤の先に使はれるのみ本望かと言ッて癇にもさはる。　我といぢめた口の皮の鞭つかひのよい事、わるその鞭で我をこゝまで驅り落さしたる。　事によれば男をでも罵りかねぬ氣強い性質、それだけにまた、やすく物に屈托とせぬ所、我からもいくらも見立げた心底！　その心底がいき〳〵してよくも我を此險難の坂路にひいた！

さあがらこの男のこゝろは馬の尾のやうにふり亂され、相手の女が憎いやら又可愛いやら、今更自分にもやゝ後悔の色と見える斗り今と昔の見くらべがしきりし胸にしかとはつかぬやう半分は我をさへ忘れて夢中になッてゐた耳元をかすかゐくゝる時計の響、二三四五時！　驚いてとね起きると見る間思はずも一聲高く

「もう明けた。　とッ殿樣の御出發と直ぐ」。

評　氣骨秀拔

以上二章第二等賞

（十）　紅顏子

樂しかッた五年前、私が十七彼女が十三の時義母―現今の―が發露した兩人が許嫁の事を……發矢！　それが私の神經へ非常の刺戟と與へ、血の循りが早まッて、潛聲の琴を彈せさした。　たしかよ彼女よも。　其時彼も兒の可憐の乙女……黑目勝ちの大きい眼で無邪氣に睨んだ。　そして又視線を母に向けた、其のいぢらしさ。　誰かゝ謂ッた撫子の花の心や！

義母と始終默然として兩人の顏をぢッと見てゐた―兩人が無聲の話を觀察せんとて？　此の樣を私と額で見つゝ默ッて居た。　が、とう〳〵火蓋を切ッて發した。　ゐゝ文机の筆の林を去ッて戀の山路になげきをこらしめんとするが―なさ記臆の和歌を其まゝ―と色氣はあれし書生の口吻……今から思へばをかしや。

其後彼女の家で朋友四五人集て天狗俳諧してゐた時Loveの一字を書てそッと見せたらよッこり笑ッふきり、少し臉を紅らめて有無いはず、引ッたくッて……無殘！　嚙で仕舞ッた。其時の得もいはれぬ可憐態！

或日の事竹ぎれで犬を擲ッたので女大學講義的に話しとしたらそれから後と活き虫一匹も殺さなくなッた可愛さ！

彼女が小學卒業の時成蹟優等の試驗表を私が前にひろげて表と私の顏を七分三分よ見上げ、見下した樣……何とも云へなうッた。

女のこれとしもとおんつくましきはかたくもあるかあると處女が謂ッふもことより昔も今も充分なものはないもれ……洋裝……紫袴……いかめしく飾ッて洋書と狹み、女學校の門に出入そるもれ―一がいに左右でもないが―無暗よジユールジモンが演說筆記を讀みたがりスユナアードミルが代議政体論をバイブル〳〵も難有がる女生徒ルキーズジユルを氣取ッて、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

いや政社へ入るの、集會條例の何だの蚊だのと時世後れの女權論をやかましういひ、しかのミならず女學校の講釋……………清少納言さへ九泉の下に之を聞て嘸ぞ驚くだらう。

かうした世の樣でとう／＼我戀人を女學校へ入學さする事を止さした。其處で萬事内氣にあッて今樣の女子を遠葉と謂ッて、嶋田髷堅くむすんだ下紐に貞操心の見えたので、嫁取ッて見れで……頓恐！

また筆をつかんとする時書齋の後に人聲。何者？と顧みれバ昔の戀人今の我妻、だから我にもあらであわたゞしう此文。疾め樣とすると鋭く見てとる我がそぶり。何と思ふてう。

「今それは何です？」

「いゝや何んでもない」。

「だッて人に隱しなさるもの」。

口の内で

「氣障な」。

右審査以外

日本音樂史稿

車總子

第一部上　歌舞

歌舞は最も上古より有りたり。日本紀に伊弉冊尊神去りませしを吹鼓幡旗を以て歌舞し祭る由見えたり。此神は我國開闢の神にてましませと祭り奉らするに歌舞と云ふと有らんには天照大神の御時より猶ほ前の代に始れるか。然れ共其祭に歌舞を用ゐし事は後世の俗に書せしか亦た知るべからず。然さば先つ神樂を以て我國の樂の始めと成せり。庭火より朝倉其駒に至る迄ての二十四回之れ神樂の遺風にて神を祭らるゝ時に用ゐられし樂にてある也。其余の樂曲種に國史に見ゆれ共其曲節舞形の如きは皆後世に傳はらず（久米舞八佾舞田舞猶節舞等則ち是なり）。書紀天磐戸の段に巧作俳優とあり（俳優をわざをぎと稱す其意「をぎ」とは招にて神懸して大神を招奉りしを謂ひつと言へり。

古語拾遺に巧作俳優相與歌舞と有り。古事記には只歡喜咲樂と云へり。此れ常の遊には非ず、其れ故は古事記傳天若日子の喪屋を作り、八日八夜遊ぶと云ふ處に遊ぶとは管絃歌舞の類を云て樂の字に當れり。只上古の舞は歌を歌ひ、其を容を以て示せしより起りしの。祭邕の月令章句に

舞は樂の容なりと有るを見れは、猥は樂の感に依て偶然に体を動かせしより始まりしか知らされ共、古代は重に樂を郊式に用ゐし樣に想はる。

○神樂　里神樂　安居神樂　高眞神
樂附山神樂　夏神樂

神樂は（我國の最古の物にして神あそびと稱ふべし。　神樂考に古事記仲哀天皇の條を引て曰く建內宿禰天臣白恐我天皇猶阿曾婆勢大御琴と見えたり。　そをかぐらと云ふは後の世のとゐれは古書よみゑき事あり云々）古事記天石窟戸の段よ

天宇受賣命手二次繫天香山之日影一而爲レ鬘二天ノ眞析一而手二草結天香山之小竹葉一而於二天石窟戸一伏二汙氣一而蹈登杼呂許志此れ神樂ならんか爲二神懸一而掛二出胸乳一裳緒忍二垂於番登一也爾高天原動而八百萬ノ神共ニ咲とみえたり。　又舊事記に云ふ、

鎮魂祭日者猨女君等率二百歌女一擧二其言本一而神樂歌舞尤是其緣者矣といひ日本紀には

猨女君遠祖天鈿女命則手二持茅纒之矛一立二於天石窟戸之前一巧作俳優亦以二天香山之眞坂樹一爲レ鬘以レ蘿爲二手繦一而火處燒覆槽置顯二神明之憑談一是ノ時天照太神聞之而曰吾比閉二居石窟一謂豐葦原中國必爲二長夜一何天鈿女命噱樂如レ此者乎云々又

古語拾遺よ

又令天鈿女命以二天眞辟葛一爲レ鬘以二蘿葛一爲二手繦一以二竹葉飫憩木葉一爲二手草一手ニ持二着鐸之矛一而於二石窟戸前一覆二誓槽一擧二庭燎一巧作二俳優一相與歌舞　中略　天照太神中心獨謂比吾幽居天下悉闇群神何由如此歌舞聊開戸而窺之　中略　當二此之時一上天初晴衆俱相見面皆白伸手歌舞目與相稱曰阿波禮阿那於茂志呂阿那多能志阿那佐夜憩飫憩（木名也振二其葉一之調也）となり。　又た仝書よ云ふ、

神武帝元年十一月可美眞手命行鎮魂祭猨女君氏擧神樂爾後爲永例云々とあり然れ共神代巻には神樂と云名目は見ゑぬ。　歌舞品目に

公事根原を引て大かた神樂は起は天照大神は天は岩戸をさゝして籠り居ひし時諸神のはのりとさきたるに天鈿女命まさきかつらと、かずらとして、ひかけを、たすきにして、うたひまひ、庭火をたきし、古より始まる事なれは我朝の風俗、神代の緣起他に異なるへきにやとみゑたり。　故に神樂に有二採物、庭燎、覆槽等式一樂工阿知女、於介と唱ふる者は皆其の遺制也。　其の器は琴并に笛を用ゐる由。　貞觀儀式清和帝神樂歌を撰定せられしより歴朝の祭祀和舞と倶に之を

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

奏す。中右記醍醐帝勅して神樂譜と定む。　一條帝又其れ歌章を定めて三十八曲と爲す。　今傳ふる所即ち是なり。　凡神樂の秘曲と名くる者中古唯多氏に之を傳ふ。　光孝帝の朝多自然麿最も其に長せり。　傳て九世の孫資忠に至る時ゐ堀河帝に仕ふ。　帝神樂を好む。屢資忠を召し本拍子と取らしめ、神祇伯顯仲王和琴を彈じ以て調習す。　資忠害に遭ふに及んで帝大ゐ歎惜し（資忠資方父子有故康和二年六月十六日山村政連に被レ害古事談ゐれ祇園會爲二傍輩山村政連一被レ害云々　又續世繼ゐれ依下害二資忠一之罪上政連出雲流罪云々）子忠方近方を召し、其れ技藝を試ゑ、親ら近方に授くる弓立宮人の二曲を以てし、宸翰神樂譜を賜ふ。二子竟ゐ能く秘曲と傳て失れす。　又一條帝始めて神樂を内侍所に畫くと云ふ。　（毎年十二月十五日に行れる）又た帝の撰定三十八曲とれ則ち、

庭燎　賢木
幣杖　篠
弓　劍
鉾　杓
葛　近世不レ用レ之　韓神　榊より之迄を採物と云
宮人　難波潟

木綿垂　一書よれ子綿志天となり　前張
階香取　井奈野
我妹子　以上大前張　薦枕
閑野　磯等　一說に云ふ貞觀中神宴此の歌を撰定す。明日忌諱に觸るゝを以て之と停む体源抄に云ふ朱雀帝れ時攝政忠平此曲忌諱有るを以て奉せを後ち復た之を歌ふ
篠波　殖春　一書槻に作る
總角　大宮
湊田　蟋蟀　以上小前張
千歳　已下其駒迄を雜歌と稱す　早歌
明星　一書明れ字衍　得錢子
木綿作　朝倉
晝目　竈殿
酒殿　弓立
其駒　是あり　一書に得錢子等幷に木綿作あし

大雨遂に埼玉群馬諸地の產と沒す　あさわらふ。　美妙齋

大魔王　下界と　さして
吐く　氣くもの　くるま陣、
天馬　驅るてふ　ヒもぴたアの
光りも粉に　引きくだけ。
夜は　白銀の　釘　うちて
ひとはり　廣き　大空の
布とて　やミよ　ぬりけさむ。
指を　ひねれバ　魔風　吹き、
口を　開けバ　魔雨　そゝぐ。
雨風　つかふ　腕を　見よ！

しべも　くされし　さくら時、
隅田の　つゝみを　うたせ行く
螺鈿の　鞍れ　かげだよも
あミだに　孕む　川の　瀬よ
この　世わたりの　撞　たゝず。
あはれ　末期と　まつむしの
秋に　あふひの　花や　われ。
水無月　あかば　風　さむみ、
日に〱　痩する　民草の
いのちの、　仇の　水覚れて
六七十里　海と　なる。
葉月　このうた　世と　末期

さしも　晴れしの　またゝく　間、
書帖を　くるに　似たりけり。
見る　間に　空は　色かへて、
雲の　形相　こく　薄く
赤達の　うでに　むしられて
魔王の　つらの　一むられ
墨色　しろく　目を　拔きて
峰れバ　魔風　山に　鳴る。
しの　つく　雨の　玉　冴えて
うらミ　溢る、　河水も
泥よ　にごりし　死人色、
溷　まきたて、　泡を　吹く。
その　泡としも　消えて　行く
活計の　みちを　いかに　せむ。
命を　つなぐ　糸ぐるま
噛ミくだきつ、　行く　涙の
その　した草は、　稻、小麥。

それ　一つ、　悟れバ　妖魔　神とある。
あさけ　無き　世に　似たれども
ないるの　きしよ　人　さかも。
世と　運命の　餌にして
運て　宇宙の　まこと　あり。
伏さねば　越さじ　をみなへし。

奴婢をつかふ心得　　たつの

世の中に人を使ふ位むづかしい事は有りません。それ相應の給金を出して使ッてやる奴婢、どう爲やうと此方の勝手、不承知あらバ追ひ出す分の事、ではなか〳〵人は使へません。　奴婢ハ給金を貰ッて使はれる、がそれだけの義務はまた盡して居る。　折合が惡るくッて喧出て仕舞ふだけなら兎に角、隨分不利な事を仕向ける例しが往々有るです。主人の目を偸んで居眠りとし、言ひ付けられた用を等閑にし、又は主人の讒詛を言ひ、使ひ先きで棒先きを切ッて見たり、もッとはげしく金箱の蓋に手をかけたり、或は密かに情夫を引き入れたり、其外いろ〳〵の方法で己れの恨みを晴らす輩がある事はよく見たり聞たりしますが、是等れ惡事は一つハ奴婢の性分にも因るものゝまた主人の使ひ方にももとづきます。

此頃の奴婢ハどうも昔しとちがひ強情だ、とは能く人の言ふことですが、世が進歩するに隨ッてだん〳〵見聞することが新らしくなり、鳥渡まア利口になる。　すると自然人の誤ちに氣が付いてくる、くるとそれを言ひたくなるのが人情、奴婢の強情も多くはこれです。　口の兩端に泡を溜めて主人の失策を敲き立てるのはもとより善くはないが主人にもよく誤ちはあり、奴婢も隨分尤もな說を出す、して見ればあながち之を擯斥もされず、彼此斟酌してなか〳〵利益を得るもれ。これと強情といふ欠点を楯に取ッてこなしつけるのから多くつかひ込むと割に奴婢も斷然去るやうな始末になるのです。　と言ッてまた奴婢にあまり寛やか過ぎて、過失と見ても咎めない人もありますがこれも奴婢を放恣らせてよくありません。　から奴婢に過失があッて、若し詫びたらそのまゝ將來を戒しめ、隱蔽したなら之を違はし或は直接に、どちらか便宜によッて精神上の懲責をするのです。　又給金はいろ〳〵多少ハあるものゝまづ世間普通にするのです。　少くな過ぎれば先方で承知せず、多過ぎればいくらか高ぶッて却ッて之を恩としません。　非常な不得策です。　そして又家政向きの事をよく下女などにまるで任かせる人がありますが、よくありません。　と言ッて又悉皆己れが差圖をすると面倒ばかりで無く損を來さすことがあります。　暮れ〳〵も奴婢を同じ人間でないやうなあしらひ方が有ッてはなりません。　これから大きな迷惑とすることがあります。　奴婢をつかふ方法の必要なるものを撰ッて左に掲げましやう

第一　主人たるべき者は常に尊嚴にかまへ、威儀を亂さず、

遂次にも下等の言行があッてはありません。　これも奴婢をつかひ、奴婢と賤貴する原子です。

第二　已れから信實に奴婢を遇して、奴婢に忠實の心を養成させなければありません。　不信實に取扱ふのは畢竟已れの損になります。

第三　東京では奴婢に出さうといふものは重にまア中以下の者―間々言行見ならひの爲先として富有の者が其子などを奴婢に出す者もあれど―して見れば自然教育も不行届きな譯ゆゑに主人はよく奴婢と信實を以て訓悔してやり、傍ら將來の家政法の話しとして聞かせ、現に此事を實行させしめなければありません。

第四　奴婢は食ふのと眠るのとが樂しみなものゆゑ、食物は不足のないやうにし、決して惡食をさせてはありません。これが井戸端會議の材料となります。　又度に過ぎて勞働させてもならず、已れの眠るときにはやッぱり奴婢も眠らせるのです。

第五　奴婢を雇ふなはまづ一年か半年試に年限を短かく定めて其眞情を見ぬき、又雇ひ入れるに約定を堅くして置くのです。

第六　多人數をつかふときにはまして注意し互ひの爭ひのないやうにし、若し爭ひがあれば依怙のない樣に和解し、偏頗の所置をしてはいけません。　こんな人の事から顯かへしのつかない迷惑をうけるやうなことがよくあります。

右にしるしたのは奴婢を使かふ大要の法ですが、これだけの事を守れば大抵差支へがありません。

秋夜野行　　朧月子

月の　光に　照らされて、
匂ふ　七草　分ヶ行けば、
そよぐ　秋風　肌さむく
草間に　虫の　聲たかし。

足の冷えるのを防ぐ法

昨年の今月のいらつめに冬の閨の心得を出したその中で落としたのは足の冷えるのを防ぐ法でした。　若いものなどは兎に角、老人又は虛弱の人などは夜臥床に入つても足が冷えて寐られず大にくるしむことで、夫がため姑息手段を取ッて行火などに依賴します。　この行火は害も既に昨年充分に言つたとほり、成るべくは避けたいもの。それで足の冷える事のを防ぐ一手段は何かと云ふに即ち寐る前に足と自分の手で凡そ五分乃至十分間摩擦して血液の循環を心からさかんにさせる事、只これです。　尤も簡略に行へる法ながらさて甚だ効驗のあるものです。

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

懸賞小說（中）

小蓮女史

大坪といふのは省中での利け物、夏畦先生と學ばずとも長官には敬して愛され、處斷と統轄とには兩つながら長けて居るとのことで、やがて出世の工合によつては未來の大臣大抵請合と世の人すら評しました。それでなッて品行もまた可く、家を明くる抔の事も無く、よしや泥水あがりにしろ夫人とそれを夫人ぞとかりそめにも大坪も國世を馬鹿にそる事も無く、琴瑟の間がまことによく和樂してことには有難いこと國子さへ實子のやうに愛撫され、面白く其日〳〵をくりまする。

たゞ人生は風波は絶えぬ是非も無さ、こゝで充ちられてはさて斷けるのも亦當然、やがて大坪の一家、あとは國子に取ッての大難が出來ました。大難、即ち國世の病氣ー

つねに心臟の痛みのために苦しむのが國世の持病、その持病がつひに高じた果ては正しく命取りともありさうに爲りました。脈搏もほとんど定まらぬくらゐ、折角の花顔も衰へにおとろへて頬の紅味さへ無くありとて、目もくぼんで、それを昨日と思ひくらべればたゞ見るものが涙でした。とても助からぬとは醫者の言葉。しかし其醫者はつねから大坪の家で尊信する人、それながら助からぬと云はれてはまるで腑甲斐の無い心もち、一人では不安心と金に飽かせて介添を二人まで頼んで療治を加へるもれゝ、命數はどうしても仕方の無いものでした。さすがに病人も氣は正氣。けッして迷ひ言をも言はず、つねから内氣なたちとて諄々しく口外して何も言ひませんが、併し或は死ぬかとはそれと自身いくらか心も付いるやう。枕もとに國子が侍して居るのをジッと見詰めては折り〳〵涙を浮かめました。

大坪も役所から歸ッて來る、「どうだ、今日もいゝかね」とさッぱりと言ふ一言には籠る思ひが千万無量。涙もろいのも女の常とは言ふものゝ、はづかしいほど只さう慰められても嬉しいやうでほろりと一しづく。かすかな聲で、

「お醫者さまは首をひねッて居らッしやいました」。

「いゝや大丈夫だよ、なほるよ。氣落ちをしちやい、ない。五十六十になつても助かる人は助かるさ。生わかい身で弱い氣を出しちやいけない。醫者がたしかに請け合ッたもの」。

「さうで厶いますかねエ」、その信じて助かりたがるだけが哀れ一層。

「ですけれど、もし万一また助かりませんでも只後の事を……この阿國もどうか宜しく……」　言ひ切れずに。

「いゝッてば、夫はまア。大丈夫だね。阿國は大事にしてやるさ。けれど治るからそんな馬鹿言はないさ」。

「はい」とばかりで頭をさげるそのいぢらしさ。

あゝさぞ死にたくあるまい。ことには三界の首枷を跡にのこして行く薄命。それと推察したゞけでもし病ひが直るものならを身を砂利にしても推察もしやう。助からぬと醫者が言ふからには——あゝ困つた。おのづから大坪も力が無く、しほ／＼として國世を見詰めて居るうちにわれ知らず目も濡れて來ました。

（つゞく）

●吉野都女補　神田宮本町の叢書閣から定價七錢の廉價を以て出板になりました。これ道の泰斗近松門左衛門の作で有名な物。叢書閣で近頃近松の作を種々に取りまとめて翻刻するのは後世に取つて甚だ便利なこと。既に同家から出板したのは出世景淸をはじめ十種ばかりです。

●日本韻文論　いよ／＼美妙齋主人が丹誠された日本韻文論は去る三日の國民の友第九十六号から出はじめました。近來の長作で終る迄には一年を費すとの事です。

日本の文華の岸上質軒さまへ

山口　樹翠陰史

むつかしやさまから叱り付けられてもまたも對面はおしをそると云ふのでなくて陰史が日本文學へ向つて聊かの婆心、いらつめの記者さま―が沒書なさるれば詮方はないもの、折角ならおもひついたまゝやつて見ましやう。

日本の文華の五号拾頁の下欄は言文論と標題を掲げて、岸上質軒さまの言文論定めて御名說もがなとおもひの外讀んで一々服せぬ事ばかり、それで質軒さまとくりへていらぬ世話かも知れぬものゝ、いらつめ愛讀の諸嬢の中には日本の文華を講讀なさる方も澤山あると信ずる、その言が反對の意見を滑らさずには居たまらず、斷然田舍兒の意見だと云事に構ひなく、書列ねて、さて諸嬢ともはじめての對面をする次第です

いかにも質軒さまの云ふる通り、言はコトバで文はフミ、すでに談話と文章と二個のものがある上は、その意味を區別する名目も二つなければありますまいが、佛語では何と云ふか陰史不學で知りませんが、兎に角、談話とその談話を書記した文章とは別物であるだけ、その意味と分別するために名目は別であるに違ひないが、その名目が別であるからと云つて談話と文章とが各々離れなければならぬと云ふ譯もありますまい、

談話あり、文章なり共に或る人の意思を或る人へしらせるための一個の手段、たゞ談話を直接にする事の出來ぬ遠方の人への意思を云ひ明かさうとか、或は天下後世へ我意思を止めて置かうとかの方便に、談話を書記すそれが文章の本職です、質軒さまの御論の通り、成程、古言でも文に載せる事は「コトアゲスル」とも云つて居たでしやう、談話を擧げて人に示すそれが文章の本職に違ひないものなら、談話と文章とが余り違ふのは實に面白くない事ではありませんか？

日を重ね月を累ねて物事がみな變遷するにつれ、言語は言語で變遷し、文章は文章で變遷し、遂に肝腎な談話と文章との間に多く徑庭が出來たのは仕方がないと言はるゝならばまだしもの事我々がその徑庭と少しなりとも矯めようと云ふ存念に反對せらるゝ、御意見が譯らない！

今文に古今雅俗の別が出來たのは變遷の世の現象でしやう、今日の日本語がすでに昔時の日本語と間に差異を生したなら今日の語で昔日の語を解する楷梯とさへおしらへればいゝでしやう、昔時の事を談話するために是非共に昔時の語を用ゐなければならぬと云つて到底盡めぬ話、たとひ昔時の事をで

今日に談話する上ハ最早今日の事物の爲に論のあさゝうあ筈(その談話をする事が)さうなれバまた御論の通り今文よ今言を用ゐるのも當然な事でハないですか?

我々と云つて英語を以つて日本の文章を作れろとハす、めません、いえむしろ英語を以つて日本ノ文章ハ作れぬから作るな、古語で今日の文章も作れまいから、今日の語で今日の文章を作れろとす、めるのミです

御論の中にハ言文一致に御賛成の御意見もあると見える、が、今日言文の一致を唱へあくてもいゝと云ふ御論には殆んど當惑をます

今日の文章ハ果して言語と同一でをやうか果して談話との間に徑庭がなりませんか、小學校の讀書その初等なのすら一々談話体に譯しなければ生徒に正當な觀念を與へ得ぬ困難ハなりませんか?

我々ハそれらの困難をたしかに目撃する、また自分さへそのの困難に當つたそれが原因で敢て言文ハ一致を主張する次第です

事物の變遷、それさへすでよわれ／＼の微力でハ牽止めかねるものを、どうかして文章と言語とを一纏めにして――古來已よ成り來つた二個の事物を合同して、一個ハ事物とする事が出來ませやう?我々も敢てそれをバ望ミません、たゞ我々の主張するのハ談話の面と文章の面とを似寄らせる、それだけで、その間に譯を置く困難を避けるれが利益です、

そしてその方法ハ恰も第二種(御論の中ハ圖式よ據り)の文章を變して談話に近づけるこれでさへ是迄よ多少先達の徑驗も我文學の犧牲となつて居ます、

第一の方法(御論の)に依つて談話を文章とする事ハ御論の通り出來ません、それが爲よ文章を讀んで直に其意味と了解そる迄の困難ハ質軒さま!いか程の御天才かは知りませんがさて／＼御神妙に打勝たれた事、御幼少の時が今更想像られて涙が潸然!

我々が主張する所もその邊に徒勞を省くこと、これです、日本人ハ才智が天稟よ立超えて居あらバよし!それとてもそれ才智を無益よ費さず、それを余所にもて往つて廣く快樂の巣を探つてハ如何ですか

我々が第二ハ方法よ依つて文章を談話に近づける、それが爲にハ先達がそでにその犧牲にあつて多少經驗も積んで來た主義が反對の人ハ目よハ淺薄とも見えませやう冗長よも感じられるでをやう、また倦厭も來ませやう、がその經驗の成績として顯れた文章に韻致がないとは!簡潔明晳優美高尚ハ皆我言文一致体獨得の長所と思つて居る者を!痛快ハ尤も我言文一致体に筋骨であるものを!纖麗も微細と、異樂!異樂ハ尚更ゝ事、すべて言文一致体か他の文体にさしぬけて居る事ハ御目よハ止まらぬか?さりとてハ餘り猜忌なおんまあこ!さりとてハ餘り嫉妬な御耳!

我々が先達ハ屢々今人の談話を以つて直に文章に上しました、そして、反對の御方ハ兎も角、數多の人の喝采をさへ得ました、そこでも談話を文章よ直寫が出來ませんか?先づ直線と描けば當然直線な定規でなければ據られません、談話を文章に載せる――云ひ換へて御論の如く「コトアゲ」をそる――に談話に遠ざかつた古來の文体を用ゐるのが、杓子を以て定規にする御譬喩にそのまゝ!

第三の方法ハ、我々が主義よやゝ遠ざかつた御論でなるから、暫く措いて言ひますまい、か、これらハ我言文一致体が天下に息きわたつた後の論、今の所さう急ぐべき必要ハないです

抑もから更先て隨分激烈な御議論です、就中方今の邦の文体ハ放縦氣儘の極よ達せりとの、散漫無統毫も歸一する所なきこと、尤も甚だしとすとか、定めて世の若年の輩ハ見て感激とそる事でをやう、その御議論を載せゝ質軒さまの御文章ハ何の文体でそれが方今日本の文章の正体であるかないかは今論を措いて、その文章の無法無体亂雜極まる言文一致派を唱へるのが機に乘じた姦傑の所爲と推しめされたのハても邪見な!

かとおもへバ今の時新文体を創せんとそるも卓見だとの、むしろ必要の事だとか、中々自分の言を食む事にさへ長ぐられた御蛍雪、敬服の外ないと知れぬ程です、そして、文ハ談話に代へて、言を口より出すに代へて筆に載せるものだとの觀念ハ、徹頭徹尾御脳髓と離れハせぬと見える、それでもなほ言文の一致にハ服せませんか?夫ハ素より談話に遠さかつていけぬ事まで御承知でも?

質軒さまも確と相手にハならぬ、方今日本の文体ハ放縦氣隨の極に達して居る、散漫無体で歸一そる所があいからと云つて激しく論しられたのは、同じ頁の上欄から同じ欄へかけての事、早く讀むものともまだその口沫が地までも墮ちぬ間、そでに何と云はるゝ?談話に近きも可あり、時よ應して談話の儘なるも可なり、やむを得ずして談話を修飾し高雅よそるも可なり、唯意を達そゐ充分あるを要すべしとハ何の口で云ふれる?前の口ですか?まさう口の入替をする長髯ハまだなりますまい!御議論の骨のないのよも陰史もやく／＼大當惑、

それでもう彼是云のハ幽靈を斫る暗黒時代の眞似、論ハ止めますたゞ、言文一致体の本味ハ自然の味です、天下の人が知つてゐます、その味を食にて居ながらその味をえらぬその人の迷ひいつか時勢と共に馳り去られる事でえやう

六かしやと申す御方なり、　　記者樣方の御意見を？　　撫筆女史

いらつめ第六十七号に於て「女子とても耳も心もある故政治上に喙を容れ、政談と聞くことなとは構はぬ」との御説をお述べになりました。が、まだ年若き令嬢をして政談者たらしめ、(尤もくだらぬ政談などして奔走するのそれけない云々とは先生も仰せられしが）且つ政談を聞かしむるは實際、如何のものでしやう。私し先般婦人演説の流行するを聞く、甚ざ心に愉快とは感じませんでした。學術上の演説に於けるも左樣でした。政談などと……かく申す私とても婦人よ政治思想は全く不必要であります、との、識は無い方が宜しいるとゝは思ひません。併しながらなたら貞淑なる令嬢をしてやれ法律、やれ政談、など噪がしえは其極逐に〇〇的の令嬢を養成し、あまッさへ之を以て女子教育の標準と誇るが如き聲の出で來らんことゝ恐るゝのでそ。が、「それハ杞憂だ」と仰せらるれバ其れまでの事、否實に杞憂とあれば誠に〳〵結構の至りでそ。そして私は現今の女子教育は可及的六かしや先生御反對？の國粹保存主義に致したく存しまそ。尤も彼れの長と取り、我が短と補ふべきは勿論です。新聞雜誌紙上よ於て各學術上の説を述ぶるは至極賛成です、が、公衆（しかも男子の多き）よ對して論議（しかも政治上の）をなすそちと如何と存じます。

東洋奇術新報記者ゝ忠告す　　美濃　撫筆女史

東洋奇術新報の記者は數部よ分欄してなりますが其中で最も力を盡されるのは容儀門のやうよ見受けました。抑この容儀即ち化粧的のことは重にいらつめ方に必要なるもの（尤も紳士方にも必要ではりましやう）、が故に、これを書くには必ずいらつめ方の愛讀に適せねバならぬこと、この心得が最も肝要です。　同新法記者の方々は編纂上常にこの注意ハなりますか？　私の見うゝました處では殘念ながら曾無と言はあけきバありませぬ。　何故と申せば全新報第二号（其他と拜見致しませぬ故存じませんが）の問答欄内よ纂錄せられましたものゝ中で、猥褻極まりて讀むに堪へぬ記事がありまそ。　猥褻ーいらつめ方の禁物？　文字を見るさへとや不快の感じが發しまそ。　で私は全新報といらつめ方よも全く不適當なもので、決して見るに足らぬー否ー見るべきものでない。とは此一事を以ても斷言するよ躊躇致しませぬ。全新報記者の方々！　以後は必ず〳〵いらつめ方の愛讀に適そべきことを忘れず、猥褻の記事などは忘れても掲載するのでありません！

通信問答

鈴れや——(一)近眼を治すには常に遠眼鏡と掛け慣らすがいいとれ一説、何さま一理の有る事です。目鏡の種類は其人の目の度に應じまそ(二)前のいらつめに出した近眼豫防の棕色の目鏡は平面鏡が普通るのです。近眼者にて兩面凹鏡がもつとも見よいですが視力は此目鏡を掛くるに從ひ益々近くなる物です。普通に用ゐる遠眼鏡で強い處で兩面凸鏡、すこし弱くなッて一面凸一面平面鏡でそ。

竹れ下——いらつめ懸賞文藝應募規則は本号にも出て居ますうら御覽なさい。

花汀——美妙齋氏と如何にも新作十二番に書きました。此ぬし」よつゞいて近々に出るのが即ちそれで、今彫刻中です。外題は「歌師三昧」。

深山木——(一)美人佳人といへバ字面では婦人よ限らぬやうですが實に習慣で女性の事になッたのでそ(二)美男子とても隨分小町西施のやうに例よ引けるのはいくらも有ります。日本とさて置き、支那では宋玉、彌子瑕、薫實、六部など。また西洋ではタッソ（伊國の文人）、ミルトン（英の詩人）、バイロン（同上）、サーウーターラレイ（英の文人及政事家）アール、オスエッセクス其他色々有りまそ(二)伽羅錦とさしたる大作とも見えません。石点頭氏の「きむすこ」も同斷と思ひます(三)日本語會話自在法の方案ハ第一に俗語文法書を作る事でそ。言文一致派が今苦心して居る處です(四)文學者の逸事を集めたものとハ餘り漠とした御問で答へ兼まそ。試ミに言へバ英のあいさつくぢすれりいのキユーリオシティ　オフ　リテラチユーアの類ですか。此書は文學上の種々の漫筆です(五)いらつめに脚本と出す立花屋氏ハ法學士でそ。本名ハやゝ差支がなつて申せません(六)都下屈指の畫工の潤筆料ハ大抵雜誌の繪一枚二圓以上三圓半以下ぐらゐです。

三坂きぬ——一谷兜軍記、嫩軍記など文章のよろしい戲曲でそ。

淺香——蛇退皮よ代用する大豆の粉は俗にいふキナコで宜しいです。但し三十分斗り清水につゝてアクを拔いたが宜しいです。御注文御藥りの事少々時日が掛れバ出來ます。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

藤元おさ――㈠前ハ三坂絹子さまれ鹿と御覧あされ㈡秋の七草で昔添にいふのハ桔梗、荊かや、女郎花、朝顔、藤袴、尾花、芙蓉で、其他に色々の人が定めた七草が有ります㈢日本古代の女流の著で最も後世にもてハやされるのも多く小說日記類です。其中の主なれは源氏、枕草紙、榮花物語れ類でそ㈣靈魂不滅といふ事ハ學派より違ひます。是と云ッて其書をあげられません、㈤東京女學校れ中れ重なれハ女子高等師範學校、明治女學校、櫻井の女學校、東京女學館杯でそ。

神田一女生――㈠御投寄の小說御草稿まだよくハ目も通しません、何にしろ中々巧みな御作、殆んど敬服しました。御本名が知れねれハ御返却れ際又其他れ御相談の際よハ甚だ殘念です。何卒御しらせ下さい㈡金と紅とれ水引ハやハり金を左にそるれが全体正しいとの事ですが、稽紙などよハ間々さうで無いれもありまそ㈢祝儀不祝儀に限らず重箱れ帛紗ハ是非其表を内にして疊んで返そもれです、是ハ紋をいたハる必要から出たことです㈣煎茶ハ飲ミ干して後茶托に茶碗を伏せて置くれハ敬禮を表するた先なれでそ。其注意で行ッて宜しいれでそ。但し飲ミ干しく伏せずお置くれハ猶茶を望む意味なれで、其時ハ更に㋲そいでふたゝび茶とすゝ先るれが主人の禮です。伏せたらバ跡を強るに及びません。

芙蓉――㈠五十三から六十四迄〇いらつめ幾本は有ります㈡一オンスハ一合の六分一です

竹下――㈠文章符号其他御尋ねれ事は委しく此次なたりの本紙で言ふつもりでそ。

TN生――㈠エレメンタリーの音とハbcaのやうあ不充分音れ事です。これら子韻が母韻と合すれバエレメンタリーで無くなります㈡ブスクリプションとハ記叙れ義です㈢翻庵子の本名ハ宮崎八百吉氏。

樹翠陰史――㈠「醉沈香」の主意ハ平等の美を述べるのです㈡同作の各回の題ハ別に古句から引いたのでありません㈢同作、「今たる〻柳眉にならじ」の意ハ「今はやまつて撓折する事でもあるまい」です㈢「つかひ先」とはまづさつと天使又ハ神使の義、英國でいふエンゼエルです㈣「漁夫いまうげをも知らぬ」の「ウゲ」ハ御分かりの無いのも御尤。之ハ「かげ」の誤植です㈤第四題「われやがて」から「これいかに」の間決して意味ハ切れません。是ハ筆で言ひよくいでも。よく御味ひ下さい。

紅顔子――㈠ハンドコロン郵送費ハ土地によりて違ひ、大に面倒ですから御送りなくても却つて先拂ひよして上げれバ宜しいです㈡眞菰ハマコモです㈢須原屋ハ日本橋區大通りです千蔭の百人首を賣るのハ金花堂須原屋でした㈣「シク」ハ如し」、「及ぶ」などの意です㈤地方あらバ七十五錢御送りにあれバハンドコロン差上ます。

とし子――世界の七不思儀ハ何々でしたか一寸忘れましたが中に万里長城、埃及のピラミッドはたしかに加ハッて居ます。ばアれ〻の万國史にたしか載ッて居ました、御覧あさい。

廣告

法之雨第三十三編目次

◎論說
〇人の公認教制定れ可否を問ふよ答ふ　（棚橋一郎）
〇明年ハ佛教家れ一大厄運あり　（前田慧雲）
〇三界唯一心　（小永井解太郎）
〇足元の御用心　（寺田福壽）
◎演說〇佛教と健全學との關係と論す　（山縣良温）
◎評論〇讀哲學雜誌因明論　（雲英晃耀）
◎寄書〇貧民救恤を論して敢て慈善家よ望む　（子安生）
◎文苑●贈雄衛鴻圖氏（日野珠堂）●呈鳥尾中將（仝上）●讀南條碩果上人所著印度紀行詩（釋妙磬）●浪華雜詩三首（服部擧柳）●次阪本書記官武豐港消夏雜詠之韻（田部井竹香）●江上急雨外一首（服部華山）●從軍行外一首（吉村香園）●嘆青樹行嚴氏之長眠詩以慰其妻子（服部竹揚）●（歌）法の雨をよミて（中谷路雄）●忠信孝三首（同上）●蚊遣火（吉村眞澄）
◎雜錄〇徒然草拔書（洒落堂主人）〇楠公金剛山居間の壁書〇蛙賛（故行誠上人）
◎傳記大圓法師小傳　（夢笑道人）
〇前編長辨僧正傳に因み大佛に關する記事二件
◎雜報●日本國兮日本國●佛教大學の基礎●政事よ干涉せし結果●遂に臍を噬むの悔ならん乎●稻垣堪空師逝矣●各宗協會の不同意●徵兵令改正れ議●暹羅皇族れ喫驚●暹羅國佛教●四徒の謝狀●曹洞有志會●日蓮宗●軍人說教●爲德會發會式●支那の耶蘇教徒●吉堀慈恭師示寂
◎新刊書籍批評◎本會報告◎廣告數件

愛知縣名古屋市下茶屋町番外
發行所　法雨協會

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

横濱土産 花織錦開業廣告

紙布製造人　神奈川縣久良岐郡戶太村 川崎花

私多年改良織立來リシ紙布織ヲ今回白井ます子ト特約ヲ結ビ賣出シ開店仕リ候未ダ不經驗ニメ諸氏ノ御需用ニ充ツヘカラズト雖妾ガ女子社會ニ實業ヲ起シ同類女子ヲシテ職業ニ就カシメ供ニ自活ヲ計ラントト立志セシハ明治十一年ナリ而シテ決定本業ニ從事スル同十八歲既ニ六ノ星霜中吾ガ理算ハ世上ノ實際ニ反對シテ艱難ノ里程ヲ蹈ミタリシ其困苦ヲ忍ベル每ニ滴々タル涙板ニソヽギテ斑文ヲ染出シタリ是花織錦ノ本色ニメ自分工夫ノ製品也今ヤ横濱ニ土産掛ナシ其品善惡如何ヲ自カラノ一分トナシ長ク古郷ニ志ヲ還シ且ハ錦ヲ着ケントス」世ノ廣告家自分製品ヲ無類飛切云々ノ語アリ自己ノ製品賞セハ自負ノ恐アリ而シテ他人ニ進ムル只々麁惡ト云ハ不可故ニ自分廣告ハ善ト惡トノ中分也其實際御需用御試驗之上御批評ヲ希望ス謹言

横濱市馬車道通常盤町
五丁目七十七番地
花おりよしき一手賣捌注文所
白井ます

私義川崎花子ノ女子社會ニ實業ヲ成立シテ同類我等ガ自活ヲ計リ職業ニ就カシムルヲ贊成シ微力ナガラ氏ガ苦心ノ一分ヲ負ヒ花おりよしき賣捌仕候花ニ熱心ニ織ルモ世ニ廣益ナケレハ所謂闇夜ニ錦ノ類哉依テ販路ノ紹介者トナル希クハ諸氏ノ御贊成アツテ一本ヲ購ヒ御試驗アランヿ同氏織物種類多シ土産ハ安價ヲ旨トシ專門ニ織出スハ
男女用帶地。フトン地。單衣地。ナリ其他窓掛。テーブル掛。幅地。唐紙地。額面等ハ御注文ニ應ジ候功用ハ濕氣ヲ受ケズ洗濯シテヨシ

土産物價額

上等木綿製女帶地

上等	丈一丈五寸　幅九寸	金七十五錢
中等ハ	右同斷	金五十錢
ナミ物	丈八尺五寸　幅九寸五分	金三十五錢

右之通リ開業ハ本月廿五日ヨリ

美妙齋主人新著
渡邊省亭密畫

嫁入り支度に　教師三昧　全壹冊續切　定價金卅五錢

新作十二番の中

右 本月中には相違なく 出板仕候

東京日本橋區通り四丁目角
春陽堂

●懸賞歌文募集廣告●

本會此度賞を懸けて弘く世の優美にして才藻に富ゝ給へる淑女達の歌文を募り●明治閨秀歌文●といふ書を出版せんとす其方法左の如し
一歌文とも題は隨意に撰まるべし　一歌文とも可成縱五寸横三寸五分位の紙を用ゐられたし筆蹟の特に麗はしきは其まゝ木板にして編中に挿むべし　一御寄贈の歌文は當時此道にて最も有名なる落合、高崎、下田、鈴木の諸大人に托し公明にして懇切ある撰擇を受くべし　一秀逸に登り給へる淑女の名譽を表せん爲め特に其ご肖像を請ひ得て卷首に掲ぐべし　一投稿期限は十月十日までとし本書は十一月中に出版し賞品と與に發送す　一本書に採錄すべき歌文の總數は凡て三百內外なるべし　一此募集に應じ歌文を寄せらるゝ時は本書出版費用として金五拾錢を添へらるべし

賞品

秀逸　中等製風琴壹個
甲　日本文學全書七冊　貴女之友自一号七十冊
乙　貴女之友自一号五十冊
丙　明治閨秀歌文二冊

東京市麴町區
元平河町三番地
閨秀歌文會

遞信省認可